

月刊

GPP



Vol.63

令和3年1月号

株式会社
グロースパートナーズ



謹賀新年

新年明けましておめでとうございます。本年も宜しくお願いします。

年が変わって2021年。年頭に思うことは、今年は仕事に没頭しようと思っている。今まで手抜きをしていたわけではないが、より実働していこうと考えている。2020年は数年後にきっと「セルドロンにとってターニングポイントとなった年であった」と言っているように思う。それも、これも、勿論、今年2021年次第だ。

ご存知の方もいらっしゃると思うが、我々は一般社団法人 生コン・残コンソリューション技術研究会（RRCS）の事務局をやらせて頂いている。法人化の構想が固まったのが6月末、そして8月19日にキックオフミーティングを開催し、10月1日に設立をリリースするという、なかなかの早業だ。代表理事の野口先生はじめ、セメント・生コンの現代トップアカデミアの方々や、再生骨材の第一人者、さらには独立系生コンプラントとしては最大手の会社の代表を理事に迎えるという、考えただけでもぞっとする“布陣”の事務局をやらせて頂いている。

先日、菅総理大臣が所信表明をされて以来、一気にCO2削減、サステナブル社会への関心が高まっている。どれだけ主体的・自主的にアクションしようとしている人がいるかは別にして、それでも間違いなく社会全体が動き出している。セメントは製造する過程で燃焼によるCO2を排出させるが、更に化学反応としてCO2を排出している。そして、生コンはCO2排出しまくって作ったセメントに、大地を削り倒して持ってきた砂、骨材、水を持ってきて作っている、言ってみれば諸悪の根源のような建築資材だ。そして、産業構造的に既得権益が当然の如く守られている業界であり、こんな未来永劫続くわけがない。

RRCSは見事に、「ちゃんと考えて、ちゃんと行動しましょう」と手を上げた。高度成長期には「鉄は国家なり」と言われた鉄鋼業界も、世界需要と韓国・インド・中国勢の勢いが増して完全に淘汰が進んだ。喫煙者が減れば、タバコばかりを売っているわけにはいかない。ペーパーレスの時代になって、製紙業界が既存の枠組みを維持出来るはずもなく、最大手の印刷会社の主要商品はもはや印刷ではない。ガラス業界も年末には報道を賑わせた。

さて、セルドロン。やっと時代が追いついて来たか・・・ 期待多き2021年である。

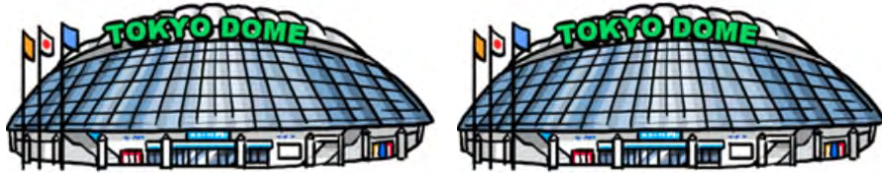
藤井 成厚

■ 戻りコンを有効活用するために ■

1. 戻りコンの発生量は？

全国の生コン製造量は総量約8200万m³。生コン出荷量の3%が戻りコンや残コンだとすると、全国で処理される余った生コンの総量は246万m³程度の試算になる。

1年で東京ドーム2つ分の戻りコンが発生している！？



2. 戻りコンの処理方法

・現場側の声

余った生コンクリートは、工事現場の責任で処理するべきですが、処理する場所がない工事現場もあり、設備を持つ生コン工場に処理を依頼するケースが多いです。

・生コンプラントの声

工事現場から戻ってきた生コンは、硬化破砕処理か洗浄処理を行います。硬化破砕処理の場合、路盤材等に再利用。洗浄処理の場合、骨材や砂を再利用。どちらも再利用出来ない場合は破棄。

ある生コンプラントでは、毎月200m³～300m³ 生コンが戻ってきて、処理費用に年間1200万円はかかっているという。

現場の協力が不可欠な状況です。

そんな時のためにセルドロンを常備ください。

セルドロン生コン用途の活用事例

地下トンネル工事

この地下トンネル工事の現場では、搬出用のエレベーターがなく残コンが固まってしまうと持ち運びが困難なため、セルドロンで処理し土のう袋に詰めて搬出。



セルドロンが必要な場合は、土井(ドイ)までお問合せください。
今後ともよろしくお願いたします。